

第14回全国学校飼育動物研究大会 開催報告
(in日本獣医師会獣医学術学会年次大会市民公開講座)

全国学校飼育動物研究会 会長 宮下英雄

日 時：平成24年2月5日（日）12時30分～16時
会 場：札幌コンベンションセンター 中ホール
テーマ：学習指導要領に位置づけられた継続飼育～地域の特性をいかして～
講 演：日置 光久先生（文部科学省） 「理科教育と飼育体験がつくる新しい学び」
参加者：170名（教員・大学・教育委員会など教育関係者、獣医師会員、保護者、マスコミ 他）
開 会：主催者挨拶 全国学校飼育動物研究会 会長 宮下英雄
来賓挨拶

文部科学省 初等中等教育局教育課程課 課長補佐	美濃 亮様
北海道教育庁 学校教育局 局長	吉田一昭様
札幌市教育委員会 学校教育部 指導担当部長	池上修次様
社団法人 北海道獣医師会 会長	波岸裕光様
ご紹介 社団法人 日本獣医師会 副会長	近藤信雄様

来賓の教育関係者は、学習指導要領に継続飼育が明記されたことに言及し、日頃の獣医師の支援に感謝と期待を述べられた。特に冬に雪の多い地域の子も達が雪に閉じ込められてゲームに浸りがちと心配を述べられた。

参加者は、北海道はもちろん、沖縄県までの、全国20都道府県から参集した。教師、教育大学生、教育委員会、PTA、そして獣医学関係者など170名であった。

内容

<口頭発表> （座長）鈴木誠 北海道大学大学院教授

- 1 西東京市の学童クラブの中野祐樹指導員が、学童クラブでのモルモット飼育体験を発表した。先生は、1～4年までの学童の子達にきつい言葉や、乱暴な態度が目立ったことからこの実践を思いつき、獣医師の指導で「ふれあい授業」を行って導入したところ、乱暴な「死ね！」との言葉もなくなり、みなで恐る恐るだが、とても大事にしてかわいがり、辛いことがあるとモルモットに慰めて貰うなど、子ども達が激変したこと。中でも、以前は争いを避けるために常に本を抱えてカーテンの後ろに隠れて過ごしていた子が、モルモットへの知識や飼い方で他の子達から一目をおかれ始め、今までいじめてきた子達にも世話の仕方を教えたりとすっかり仲良くなり元気になった事を紹介なさった。
- 2 札幌市立栄南小学校の熊谷雅史教諭が、生活科の立場で動物と子どもの事を主題に、札幌市の小学校の動物飼育状況の調査結果と担当校での実践を報告した。市内では、雪が降るため飼育舎にビニールカバーをしたり、校舎内で飼育して防寒に努める様子を紹介なさった。また、担当校のウサギが死亡したため、動物園等に問い合わせる入手に努めているが、なかなか手に入らないとのことであった。
- 3 旭川市旭山動物園の坂東元園長が、市立旭山動物園と旭川市との連携による小学校に動物を貸し出す教育プログラムについて報告した。短期間の飼育体験では、季節の変化や死なれた時に感じる「命の実感」が得られにくいため、動物園としては、一年間の貸し出しも奨めているが、色々な不安から学校は2週間以上の飼育体験をせず、しかも旭川市内の小学校での動物飼育実践校は皆無であると、悩みを述べられた。園長は、生き物だから貸し出し中に死亡することもあるだろうが、子ども達にはそれを含めての貴重な体験なので、学校は心配しないで欲しいと結ばれた。
- 4 社）石川県獣医師会の動物飼育支援の担当委員長であり、内灘町の教育委員である田村兼人獣医師が、アンケート（回収率100%）をもとに降雪地である石川県の学校の動物飼育状況を報告し、また学校の飼育動物を活用した命の授業での子ども達とのやり取りを紹介した。アンケートでは、県全体の小学校での動物飼育率は60%だったが、以前より獣医師会との連携がある内灘町、金沢市、かほく市では、ほぼ100%で飼育活動がなされているなど、大きな地域差を報告した。これは、獣医師の支援体制により学校が助かっている状況を示唆していた。

★熊谷教諭と田村獣医師の発表について、2月13日の日本教育新聞に掲載されました。

<パネル発表>

- 1 科学的な思考力の芽生えを育む動物飼育の実践 岡村 廣 (山形大学附属幼稚園 園長)
科学的な思考力の芽生えを育む幼児教育の実践として、子ども達がウサギの飼育を通じて、ウサギのために、いろいろ工夫し協力しあう様子を、豊富な写真で報告なされた。
- 2 心を成長させる学校飼育活動 石島敦子 (佐野市立栃本小学校教諭)
飼育活動を通じて、子どもたちが心を通わせながら仲良く過ごしている様子…とりわけ、足の不自由なウサギがたくましく生きている姿を見守り大切に育てる中で、自分たちも頑張ろうと勇気づけられ日々成長している子どもたちの様子を、子どもたち自身の文章や言葉、温かな表情の写真等も交え展示、報告した。なお石島先生は都合で参加できないため、栃木県から学校飼育支援担当の委員が運び、展示を行った。
- 3 中学校理科における「マイウニ飼育」の実践 小川博久 (木更津市立木更津第一中学校教諭)
メダカの卵を各人に持たせて、孵化からの成長を観察させる「マイメダカ教育」の発案者である小川先生が、海の近くの地の利を活用した「ウニの孵化から成長を観察する実践」を、1センチまで育った瓶入りのウニを抱えて報告なされた。なお、容器を大きくすると大きく成長することのであったが、最初「成長させて食べよう」との目的だったが、中学生達は、大事に育てたため「食べること」はとうに忘れた、とのことであった。
- 4 獣医師会・各地の支援体制について 中川美穂子 (社団法人 日本獣医師会)
23年12月に調査した全国の自治体の獣医師会の「学校動物飼育支援状況」を展示した。また、同時に中川が行った「学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響(学年飼育活動が与える、児童の人へのあたたかさや学校適応への影響)」と「小学校での動物飼育体験のあり方から見た作文の分析」(学校での動物飼育体制(学年飼育か委員会飼育か)が与える子どもの作文能力への影響)」について、展示を行った。

<講演>「理科教育と飼育体験がつくる新しい学び」 日置光久 視学官

文部科学省初等中等教育局 理科担当の日置光久視学官が、現学習指導要領を踏まえて、4年生理科の「人の体のつくり、動物の活動や植物の成長」について、解説書には、「ここで扱う対象として、骨や筋肉の存在を調べる際には、自分の体を中心に扱うようにし、他の動物としては、骨や筋肉の動きが調べられる身近で安全な哺乳類、例えば、学校飼育動物の観察などが考えられる。」と明記したことを紹介なさり、「学校の動物飼育体験という具体的な体験(直接体験)など実際に体験したことは、長期記憶に入り一生忘れることはない。理科教育は、それらの直接体験を下敷きとして、抽象的な考察(間接体験)でまとめ、最終的には言葉という抽象的な手段に置き換えなければならない。」と述べて、「学びの三角」の図を示し、その体験と言葉の関係について述べられた。つまり、三角形の底辺である直接体験が大きくなれば、それをまとめる映像や図鑑などの間接体験への理解が広がり、その結果豊かな言葉・人格が構築されると話され、飼育体験の大切さを実践者たちと共有なされた。

<講評>

中川美穂子事務局長が、参加者と発表各団体にお礼を述べ、ソニー教育財団や生活科・総合的学習協議会の協力で、雪国での実践を集めたことを紹介し、今回の研究大会がきっかけになって北海道でも獣医師会の支援を得て、子ども達にとって良い実践が広まるように希望を述べた。

また、飼育活動が子どもに影響を及ぼすには、動物に対する子どもの愛着が鍵であり、それを培うためのポイント、1学期の飼育導入授業、楽しい飼育とふれあいの持続、3学期の振り返りの「下級生への引継ぎ集会」などの図を示して、飼育舎での飼育活動によって子どもが変化するのは、2学期になることと、継続飼育とは四季を経て、次学年に引き継ぐ振り返りの授業までの一年間が最低期間であると話した。そして、自身の「教育に位置付けられた飼育活動が、子どもの道徳心や作文能力に与える影響」についての研究結果を紹介して、子どもを育てるには手間がかかるので、頑張りたいと結んだ。

なお、最後に、飼育チャボが死んだ3年生と担任、学校獣医師の「命の授業」のビデオを映したが、その直後に鳩貝副会長が、ビデオの子ども達と教師の様子に、声を詰まらせながら閉会を告げて、会は終了した。